

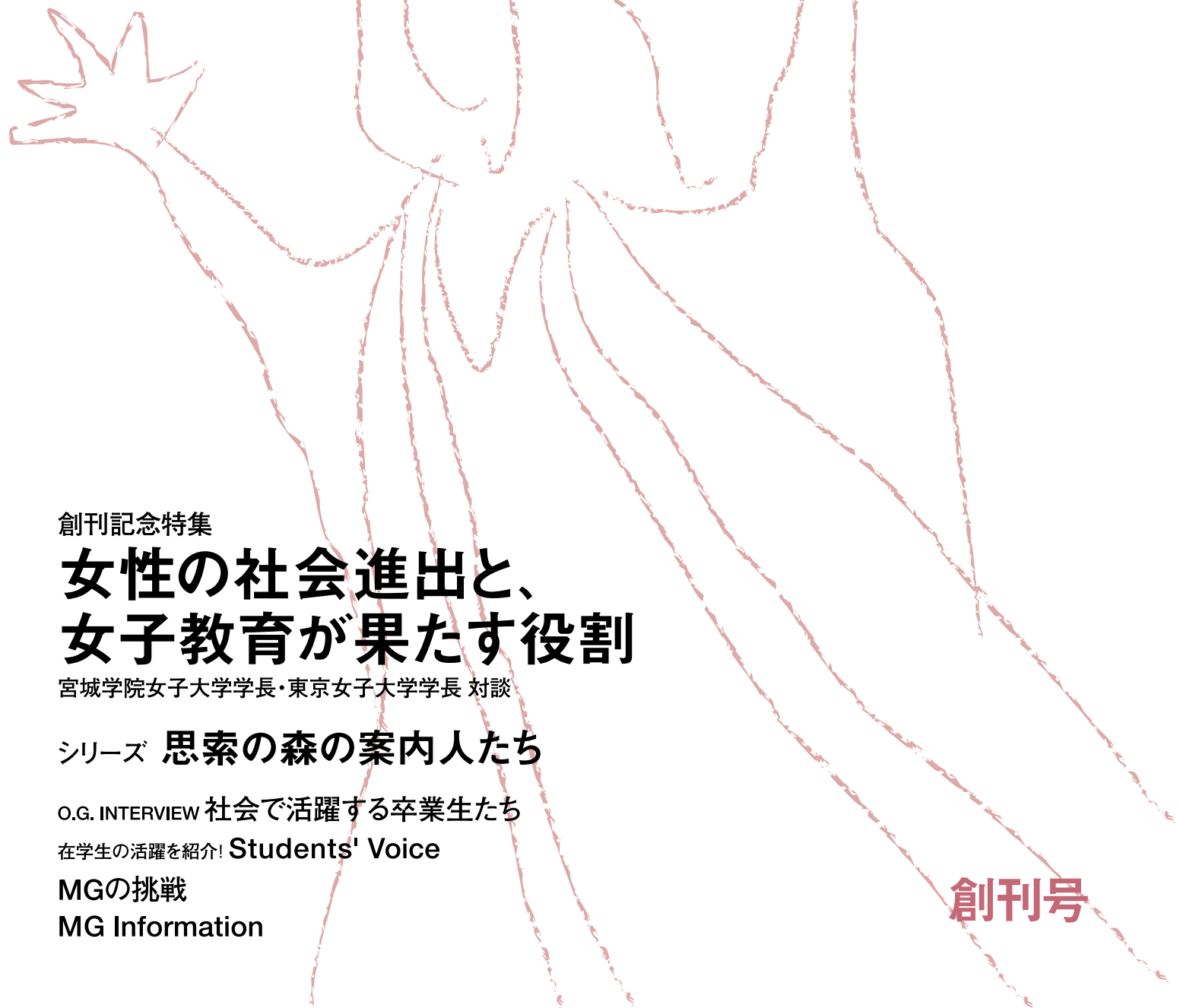
P

VOL.1
2006.4

宮城学院女子大学
MG発—コミュニケーション情報誌「バルティール」

「Partir (バルティール)」はフランス語で“出発する”——
——新しい時代に飛びたくとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

Partir



創刊記念特集

女性の社会進出と、 女子教育が果たす役割

宮城学院女子大学学長・東京女子大学学長 対談

シリーズ **思索の森の案内人たち**

O.G. INTERVIEW 社会で活躍する卒業生たち

在学生の活躍を紹介! **Students' Voice**

MGの挑戦

MG Information

創刊号

Partir

VOL.1
2006.4

宮城学院女子大学
MG発—コミュニケーション情報誌「バルティール」

発行/宮城学院女子大学

編集/宮城学院女子大学広報委員会

TEL:022(279)4698

創刊記念
特集

宮城学院女子大学学長・東京女子大学学長 対談

女性の社会進出と、 女子教育が果たす役割

男女共学志向が進む学校教育の中で、「女子大学であること」は学生にとって、社会にとってどんな意味を持つのでしょうか。
東京女子大学学長・湊 暎子氏を招き、女子教育のこれからについて対談していただきました。

キリスト教を土台とした価値観

吉崎学長 私は昨年4月にこちらに赴任して来たのですが、深い森に囲まれ、白鳥が越冬する沼があり、芸術的な建物が調和して建っているという宮城学院の環境には本当に感動しました。キャンパスの雰囲気も、120年の伝統を語っています。また、パイプオルガンが3基もあり、それが日常的に使用されていることに文化の香りを感しました。

そして一番に思うことは、キリスト教に基づいた価値観を教えることができること。公立大学では、宗教など特定の価値観を講義で話すことはできませんでした。生きていくうえで学生たちに必要なのは本当のところ「基本的な価値観」だと思うのですが、これまではそこに入り込めなかったのです。

湊学長 東京女子大学(Tokyo Woman's Christian University)の英語の名称には、日本語の中にはありません。創設者の新渡戸稲造先生が、キリスト教を土台にした教育を基

本とするが、そのプレッシャーをかけずに犠牲と奉仕の精神に立つ女性を育てたいのだとおっしゃっています。キリストの「心もちを持つ人材を育てたい」と表現されていました。

また、本館の正面の壁には、ラテン語で新約聖書の「フィリピ人への手紙第4章8節」すべて「真実のこと」という言葉が刻まれています。

東京女子大学 湊学長



大切に「という言葉をよく聞きますが、その「自分」が確立されていないんですよ。自分がどこにいるのかわからず、自分探しをするわけです。自分はこの「立つ」という価値観を見ているのが大学。大学側はいろいろな価値観を示して「一人ひとりが自分を確立するのを助ける役割がある」と思います。

湊学長 東京女子大学の女子は英語「woman」。複数ではなく単数なんです。これは一人ひとりが大切という思いが込められています。毎年9、20人が入学するのですが、入学式では全員の名前を呼ぶんです。

吉崎学長 全員ですか。うちも入学式では、一人ひとりに向きあって教育をしますよというメッセージは流しますが…。

湊学長 名前を呼ぶことで、他でもない「あなた」を待っていましたという思いを身体で感じてもらうんです。どんな学生でも存在する(to be)だけで価値があると伝える。「知る(to know)」「知り、実践(to do)、実践(実践)で存在すること(to be)が大

事」と新渡戸先生がいらっしゃいます。キリスト教では、個がいかに価値があるかを教えることができます。それなくしては人格形成は語れない。キリスト教系大学としてそれを発信しなければならぬ責任を感じます。

生きていくうえで必要な価値観は、 キリスト教から学べるのです。(吉崎学長)

一人ひとりが大切な個である

湊学長 それは個が確立されていない概念で、むしろ。公共の哲学といいますが、西洋のキリスト教が土台にある公は、確立された私が集まって公をつくる。でも日本は「公」があつて「私」がある。滅私奉公の概念が今でも存在しています。

小さいころに「咲いた咲いた」とチューリップの歌を歌いましたが、「どの花を見てもきれいなはずの花が集団に埋没し、それで安心してしまっている。「みんなが向いている方と違うけれど、私はごつちを向いて生きよう」といった、集団意識構造を破る世界観を持つ人がいなければ、これからは日本は変わらないですよ。もっと言えば、そういうお母さんが育たないと日本の男性も変わらないと思っています。

宮城学院女子大学

吉崎学長



同性同士で磨かれる生きる力

吉崎学長 宮城学院も少人数制教育で一人ひとりに気を配る教育を心掛けています。ところで最近歴史のある女子大学が共学にかわるころも増えてきましたが、先生は女子大学である必然性をどうお考えですか？

湊学長 東京女子大学は最後の1校になって共学にはならないですね。共学にしてしまえば、名前から女子が取れて東京大学になっちゃいますよとよく冗談を言っていますが(笑)。男性と女性の平等は、法律の面で整備されてきて、また実践できるレベルではないですが、ね。せつかく教育を受けても、上の役職につくなどいざという場で自信がなくなってしまう女性が多い。日本には女性のリーダーがなかなか育たないんですね。

吉崎学長 世界的な調査でもアメリカの女性は優しさ、忍耐力などいろいろな項目で自分に自信があると答えるのに、日本女性は全くないよと答える…。

湊学長 そう。日本には控え目が美德という文化がありますよね。そういう日本の概念を破らない限り、世界では活躍できません。

私は外国生活が長いほうなので、ときにひんしゅくを買ったくらいは積極性があるんですけど(笑)国際会議では、自分からどんどん発言しないと通用しない。それを知っているから、日常英会話なんてできたって「フュー、フュー」ができませんよと学生に言っています。その点、韓国・中国・インドの女性は上手なんです。日本では間違ってもいいから発言する習慣ができていないから本当に控え目なんです。

大学は「自己発見器」。一人ひとりが輝く
個を確立する場です。(湊学長)



女性の社会進出と、
女子教育が果たす役割



吉崎学長 国際的に活躍する女性は、自己を確立していないとダメですね。

湊学長 そのためには共学ではダメなんです。18歳から22歳くらいの頃は、異性を意識する世代。控え目な態度がかわりいらしさと混同されたりします。大学時代にはそんなことは気にせず、女性が主役の中でお互いにぶつかりあったり、自分で決断したりして自分を磨き上げることが大事なんです。

私はよく学生に、24時間を自分のためだけに受け入れる姿勢が必要です。公立の大学は全般にそういう意識が薄かったように思います。宮城学院は先生の意識が高く、学生がイキキしていいです。

湊学長 よく大学の評価を語る時、東京女子大学の第二志望定着率はどのくらいかいいですね。そういう数字ではなく、卒業生がどう社会で生きているかがその大学の評価になると私は考えます。そういうた教育を自信を持ってやっているのだから、出口を見てほしいですね。

吉崎学長 「就職率」だけにこだわると大学の評価もありますが、先生のおっしゃる出口は人全体ですね。卒業して社会に出てからずっと人生は続いていくわけですから。
湊学長 出口調査といえば、東京女子大学では1987年に「女性論コース」をスタートさせましたが、その教育と卒業生のその後を分析して、「女性の自己確立とキャリア探求の基礎をつくるリベラルアーツ教育」としてまとめました。それが2003年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」の審査に通ったんです。これまでの教育が認められてうれしかったですね。社会に対しての女子大学の使命はまだあると思います。

東京女子大学 学長
湊 晶子氏

1932年生まれ。東京女子大学社会科学科(西洋史専攻)卒業。フルブライト奨学生としてホイートン大学大学院修了後、ハーバード大学神学部で初期キリスト教史を学ぶ。2002年より同大学学長に就任。



宮城学院女子大学 学長
吉崎 泰博

1943年生まれ。九州大学文学部卒業。メリーランド大学で博士号取得。2002年北九州市立大学学長、2005年4月より本学学長就任。

に使える今のうちに、自己発見をしないとダメです。女子大学でしかできない時間を無駄にするなと。

「いいから、なかなかそれができないでしょ。いい友達をたくさん持ちなさい」ということを自分の経験を踏まえて話します。こんな感じだから学長室は学生達が自由に話しにくる場となっていて「サロンド・ミニナト」なんて呼ばれているんですよ(笑)

また、女子大学では人生のモデルに会える。キャリアを築いた先輩方の後ろ姿をみることもできる。ああいう女性になりたいと思う女性に会えたらその人の人生が変わります。

吉崎学長 なるほど、ロールモデルに会える。宮城学院にも、女性の先生がたくさんおられて、それぞれ多様な生き方を力強く実践されています。そういう女性を目の前で見られることは学生にとって勉強になる。すると早く宮城学院にも女性の学長が来るんじゃないかな(笑)

成熟した社会に輝く女性

吉崎学長 このあいだ、世界経済フォーラムが出した各国の「女性の社会進出度」を見てみましたら、日本は52位でした。経済は2位なのに、52位。もちろん社会進出だけが人間の評価ではないですが、もう少しがんばらなければと感じました。女子大学が学生に遠慮せず社会で活躍しなさいと、メッセージを伝えたいんじゃないですかね。

湊学長 女性が社会で上に行けるようになる。最後に宮城学院の印象や期待することなどを話したいのですが。
湊学長 歴史に立脚した不動の建学精神を守り、ゆるぎない信念を持っていることに感動しました。それから教職員がひとつになっていて非常にいい雰囲気ですね。これから日本の女子教育のリーダーシップを取っていただきたいと思えます。

吉崎学長 ありがとうございます。日本の女子教育は、もっと女性の人間力を高め、自分の選んだ道を自信をもって進んでいけるパワフルな女性を育てなければなりません。その責務を女子大学が負っていると思います。

には、男性も含めた日本の社会構造をどう変えるかがポイントになってきます。30〜40代の男性はとにかく勤務時間が長い。家事をやりたい男性が50.4%いるのに、実際それが可能なのが10%を切る結果も出ています。男女共同参画時代といってもこの社会構造を変えない限り、女性が社会に大きく進出していくのは大変なことですよ。自己を確立した女性を育てるとともに、そういうた社会の成熟度が増していかなければ、と感じます。

吉崎学長 実は男性の意識を変えるのは、女性の言葉ではないかと思えます。家事や子育てが社会進出を妨げるなら、例えば結婚する前に「私はこういう家庭をつくりたい」「どうありたい」と自分の理想を男性に伝えることも大切ですよ、それができる女性を、宮城学院で育てたいと思っています。

湊学長 私も経験上から話すと、結婚においてお互い話し合って理解しあい、歩みよめる関係をつくれるかは、自分らしく生きていくうえで大切なことですよ。

数字では分らない大学の評価とは

湊学長 自分の子どもには「頑張りなさい」「ではなく、」自分のできる限りをしなさい」と言っていて育てました。そういうられると、子どもは自分のできる限りを考えて行動する。これまでのがんばりを否定されたとは思われない、ためでも悔いが残らないものなんです。ベストを尽くしたのであれば、お母さんはいいと言っているんです。それは学生に対して同じことですね。「できる限り」やった学生を認めてあげて。

先生の励ましを受けて、ほんとうに本学がそのリーダーシップを取っていただけら、と強く感じました。
私は、女性学を研究している妻から、女性が女性として人として生きていくうえで何が障害になり、男性はどんな意識を持ってほしいかということを、何十年にわたって教わってきたつもりです。

一人ひとりが個性を伸ばしながら大学を卒業し、自分らしい人生を生きるために、大学として何ができるのか。宮城学院らしい教育の実績を挙げることをめざすと思っています。

今日は女子教育の大先輩からお話を伺うことができてうれしく思います。ありがとうございます。

湊学長は、キャリアを積みながら自ら3人のお子さんを育て上げたお母さんでもあります。社会に進出し、輝いて生きる女性の人生のモデルそのもの。
女子大学の意義も含め、女性であるというものの前に、存在そのものの価値やひとりの人間としての個の確立の大切さを説かれました。

思索の森林の案内人たち

「学問する」ということは、新しい知識の世界を拓く喜びに満ちています。学ぶことは、きつむりながらの人生に輝きを与えてくれるはず。そんな世界を案内してくれる先生方に、「学びの姿勢」についてお話を伺いました。

どう生きるか 古代から未来を紡ぐ

古代文学から今を学ぶ

日本書紀や古事記などに見られる神話や物語、万葉集の歌など、古代日本文学の研究が専門です。ここではいつ古代は奈良時代。日本が無垢なまま他国の文化を受け入れた多国籍的文化の時代です。そこは古代日本文学から何を学ぶのか。

私は当時の文学から古代人の発想や意識を学ぶことで現代が見えてくると考えています。つまり対比させることで今が浮かび上がってくるんですよ。もちろん、時間を溯って対比するだ

けなく、東アジアの隣国との対比も必要になります。そしてそこには当然未来へ向けての発信という視点がなければ意味がないとも考えます。

沖縄・組踊の研究を通して

17年ほど前に「南島における宗教と民俗」をテーマにした研究グループが出来、沖縄の重要無形文化財「組踊」の研究を続けてきました。地理的にも、歴史的にも、沖縄は多国籍になりざるを得なかった独特の文化を持っています。組踊は三線や鼓、胡弓などの器楽、舞、言語表現(セリフ)で演じられます。能や歌舞伎のようなものを想像していただければいいのですが、琉球王府が琉球独自の文化(私は「根生いの文化」と呼んでいます)を下敷きにしながら、中国や大和(日本)の芸能を組み合わせて創り上げた、琉球文化を象徴する芸能なんです。

研究をする中で交流が生まれ、1999年に当大学の講堂で、宮城県

で初めて「組踊」を公演しました。ほかにも琉球大学の八重山芸能研究会や沖縄国際大学の「双葉踊り」なども紹介しました。宮城学院は東北における沖縄芸能発信の拠点と自負しています。授業でもとりあげています。学生たちは授業の中で沖縄のリズムやしぐさを実際に体験したり、一緒に演奏することを通して、身体で沖縄の文化を感じる事ができたようです。

また私がこの組踊の創始者・玉城朝薫について書いた「玉城朝薫の世界」(瑞木書房)が、昨年(2005年)、沖縄文化協会賞(仲原善忠賞)を受賞しました。組踊を初めて文学的視点で説いたことが評価されたものです。

文学から何を感じ、どう生きるか

こうした研究・体験を通して学生たちに伝えたいのは、学ぶということは、単に知識の集積ではないこと。研究の中から、または作品を読んで、何を感じ何を主張できるかが大事です。自分はその何をどう考えて生きるのか、そしてそれを人間関係に生かしていく、それが学問だと思っています。



古代日本文学

日本文学科(古代日本文学)
犬飼公之 教授

音楽文化学

民族音楽学

音楽科(音楽文化学・民族音楽学)
大内典 助教授

体験が深める「音」への思索

文化や思想を映す音楽

音楽を学ぶなら西洋のクラシック音楽で、普段聴くのはポピュラーミュージック。情報があふれているわりに学生たちの実際の音楽のかかわり方は意外と狭いと感じています。

私は音楽文化学・民族音楽学が専門ですが、音楽音からはその地域、時代の生活や思想、文化が見えてくるんですよ。例えば、日本は古くから生活の中で音を大事にする文化を持っているんですよ。風鈴や水琴窟などがいい例です。日本の音楽を理解するときに邦楽だけでなくそういった「音」を考えてみる。そこに深い思想があるかもしれないですね。

留学で再認識した日本文化の価値

この十数年間は、山形・出羽三山に派を築いた羽黒修験に着目して「だから」日本の音の文化を探っています。修験道は、山や自然への素朴な信仰を仏教や道教の理論で体系づけたものですが、修験者(山伏)は、法螺貝(ほら貝)をはじめ、音や声を操る達人でもありました。彼らの音文化を、自身山伏になって修行を体験しながら分析していきます。

昨年1年間は、これまでの研究方法を再構築しようとロンドン大学SOAS(School of African and Oriental Studies)に留学してきました。「学生として訓練すること自体も新鮮な体験でしたが、日本の文化を外からの目線で見ることによって、その価値を再認識できましたし、研究者としての責任も感じました。

本物の考えは体験から生まれる

私は修験道の声の使い方や音を聴くといった身体の使い方に注目していることもあり、物事を理解するとき、「実際に体験すること」はとても大切な方法だと考えます。文化系の調査実習の授業では、学生たちに右手の「鬼剣舞」の踊りを体験させるんです。自分の身体を使って伝統芸能における身体の使い方、考え方を実感し、それを伝承することの価値や苦勞を知る。体験しないことには自分の中から本物の考えが出てこないからです。

広く見るとは深く知ると

音楽を演奏したり、または研究したりするとき、自分のめざす音楽を広い視野で眺めてみるこの重要性を伝えたいですね。例えば他と比べてみることで初めてその価値や特長をつかめることがあります。また人間が作る以上、そこに必ず人の営みや感情がかかわっているはず。音楽のまわりに広がる文化にも目を向けてほしい。広く見るとは深い理解につながるんです。自分の引き出しを増やせるのは学生時代。自分の可能性がどなたにも芽を出すか分からないから、肥やしになるものをたくさん蓄えておくべきです。



この本を読むと「音」への思索が深まる



● 犬飼先生おすすめの本 ●



「玉城朝薫の世界」
犬飼 公之著
瑞木書房 3500円
沖縄の重要無形文化財「組踊」の創始者・玉城朝薫の作品や作家としての彼自身について書かれている。組踊を初めて文学的視点で説いた、犬飼教授の著書。

● 大内先生おすすめの本 ●



「千年の修験 羽黒山伏の世界」
島津弘海・北村晋雄 編著
新宿書房 3000円
独自の修験文化を築き上げ、生きた宗教活動としての価値を国内外に広く知られる「羽黒修験」について、修験者・研究者が解説する。

社会で活躍する卒業生たち

O . G . I N T E R V I E W

授業で出合ったメディアの世界
「伝える仕事」はおもしろい

タレント・レポーター(MOCプランニング所属)
櫻田 彩子さん



思い出の剣道部の部室前で…。



— テレビなどで、明るくハツラツと活躍されている姿を拝見しています。

自分が媒体となって人に「伝える仕事」がしたい。テレビ番組のレポーターなど、今の仕事に携わるようになったのはそんな思いからでした。3年生の時に応募した「ミニミニFM」のサポーターが出发点なのですが、実は「アメリカ放送史」という授業を受けてメディアの仕事に関心を持ったことがきっかけ。将来は学校の先生になるかと思っていたのに、卒業する頃には迷いなくこの道へ進みました。たくさんの人たちからさまざまなことを吸収できて、またそれを人に伝えることができる。そんな仕事にやりがいを感じています。

— 学生時代の思い出は？

たくさんありますが、一番の思い出は4年次の北アリソナ州立大学への海外研修です。事前にしっかりと現地のこともしっかり勉強して行くのですが、初めての海外で見るもの聞くものすべてが新鮮でした。一緒に行った仲間とは今でもすごく仲良し。1か月という短い期間でしたが密度の濃い、貴重な経験をさせてもらったと思います。また、剣道部での練習も楽しかったですね。在学中に三段を取ったんですよ。

— 後輩へのメッセージをお願いします。

宮学は、キャンパスに入った瞬間から他と空気が違うのを感じます(笑)。しっかりと勉強もするけど、自由でのびのびとした雰囲気がある。卒業して思うのですが、宮学で学び、ここに根を持つ人は、前向きで明るい人が多いですね。

学生の皆さんは今、ここで学んでいる時間を大切にしてください。活用できるものは何でも活用するくらい気持ちで前向きに学生生活を送ってください。高校の学生生活と同じくらいに自信を持って社会に出るつもりで頑張ってください。

櫻田 彩子さん 1997年 英文学科卒

レポーター・タレント(MOCプランニング所属)として仙台を中心に活躍、現在「OHバンドス」(ミヤギテレビ)、「定禅寺家の人々」(仙台放送)などに出演中。東北大学大学院経済学研究科で現代応用経済科学を専攻する大学院生の顔も持つ。「メディアと市民」をテーマに修論に取り組んでいる。

Students Voice

～在学生の活躍を紹介！～

「せんだい杜の都親善大使」 としての活動から得たもの



「せんだい杜の都親善大使」は、仙台七夕祭りをはじめとするお祭りやイベント、仙台の観光としてシティセールスを行います。またさまざまな観光事業をも企画しています。親善大使の活動を通して、私は本県に多くの人々と出会い、さまざまなことを学びました。仙台を盛り上げよう、よりよい街にしようとかんがえている人々が大好きなこともこの活動を通して知りました。たくさんの方々が、私達が導く仙台を支えてくれていきます。仙台の魅力をより多くの方に届けてもらえたらいいな、私も自分の感じる仙台の魅力を自身の言葉でお伝えできれば、と思っています。(菊地 梨々)

登いた先で「仙台はいい所ですよわね。」「今度、七夕を仙台にいくんですよ。」など、お言葉のほほから声をかけていただくことがたくさんありました。仙台の魅力をお伝えするのですが、逆に私のほうが、多くの方からパワーをもらい、励ましていただいたほうが気がします。お仕事の度に「期一会」の出会いが得られ、人と人との繋がり大切さを感じることができました。また視野が広がって、私自身が成長できたと思います。この経験を、今後は社会人として生かしていきたいと思っています。(佐藤 由香)



左：Y・Sさん

保健福祉学科4年
宮城学院高等専門学校出身

右：N・Kさん

英文学科4年 宮城学院高等専門学校出身

2005年5月より2006年4月までの期間仙台の魅力を広く国内外にPRする「せんだい杜の都親善大使」として活動しています。

デザインする楽しさを実感 「キャンパスミュージアム」 設計で優秀賞

作品は「インテリアデザイン演習」での「キャンパスミュージアム」という複合施設の設計課題です。大学の現状をみつめ直し、地域の人々にも開かれた機能があることが大学の魅力づくりには必要と考え設計しました。

作品のコンセプトは自然です。宮城学院の自然豊かな環境から建物を「巨大な木」と見立て、内部空間を「果実」として考えました。1階は暖やかな空間とし、ショップ・カフェ・レストランおよび各学科の学生主体に展開するギャラリーを設けました。レストランは礼拝堂での挙式後のパーティースペースとしても使えます。2階は教養空間で、図書・情報センター、学生の実習の場ともなる託児施設を設けました。スタジオのある情報センターは情報発信基地となります。3階は回遊型緑化空間です。他にも大

学を訪れる方々から地域の方まで快適に利用できるホテルを設けるなど、あらゆる人々が楽しく過ごせる空間づくりをめざしました。

このような取り組みを通してデザイン、空間構成の面白さ、プロセスの楽しさを実感し、建築への関心を更に深めています。



Y・Yさん

生活文化学科3年
宮ツルース工芸高等専門学校出身

2005年9月に開催された第13回JIAA東北建築学生賞において、審査の結果、最優秀賞と一賞の2で優秀賞に選ばれました。

韓国研修旅行の体験と学び



昨年の夏、初めて見たハングルの看板、聞きなれない言葉などが、私に韓国に来たことを実感させてくれました。暑い日の夜のカルビとごちそう、出た本場のサムスは辛くて涙ぐんでしまいました。暑い日本のものと比べて違って伝統的な韓食の香りが、これが韓国の文化だと思いました。

2日目は大田というところにある忠南大学を見学し、学生と交流会をもちました。何を話したらいいのか不安でしたが韓国の学生はみんな温かく、日本語が上手くて日本に対する知識や韓国文化の学びがどんどん深くなりました。私も彼らと一緒に韓国の文化や言葉を学びました。

3日目は大田大学の学生たちとソウル市内を見学しました。いろいろな名産品を見たり買ったり、付き合ってもらったり、充実した日々を過ごしました。そして最後は韓国を離れがたくなったほど楽しい思い出が溢れていました。



M・Kさん

日本文学科2年
宮城学院立石高等学校出身

2005年8月中旬、日本文学科の学生15名が参加し、3日4日の韓国研修旅行が行われました。

*学生の学年は2005年3月現在のものです。

宮城学院 120th anniversary

～“宮城学院らしさ”をお伝えする Message Sweetsを創りました～



手前「Visitandines à la MG (ヴィジタンディヌ・ア・ラMG)」 奥「Carrénnois (カレノア)」

5月末より学生スタッフによるキャンペーンを開始します! お楽しみに!!

宮城学院は今年で創立120周年を迎えました。2005年から2007年にはさまざまな120周年記念事業が催されていますが、写真のお菓子もそのひとつ。「宮城学院の伝統の重厚さと華やかさを表現し、あらたな伝統を創りたい!」そんな思いに、多賀城「SHISEIDO」の村田シェフが見事に応えてくださいました。

「ヴィジタンディヌ・ア・ラMG (写真手前)」は、17世紀フランス北部の修道院でつくられていた伝統的な菓子にアジアの香りのアール・グレイ紅茶を加えたものです。しっとりとした口触りと食べた後にほのかに残るアール・グレイの上質な香りがなんともいえません。

「カレノア (写真奥)」は、ウィーン風のクッキーをベースにして、たっぷりのアーモンドを入れたものです。粉砂糖をまぶした素朴な外観からは想像できないような上質感が味わえます。

宮城学院スイーツでほっとひと息……

“宮城学院”を感じてください。



「ティッピング・ポイント—いかにして“小さな変化”が“大きな変化”を生み出すか」

マルコム グラッドウェル (著)、Malcolm Gladwell (原著)、高橋 啓 (翻訳)

現代のニュースで耳にする不思議な現象の数々。この本は、その不思議な現象の原因を解明すべく、社会と人間の心理とのつながりを追究しています。自己を理解し、更には社会とビジネスを理解するための、お勧めの一冊です。



「チーズはどこへ消えた?」

スペンサー ジョンソン (著)、Spencer Johnson (原著)、門田 美鈴 (翻訳)

目的を持つのは大切ですが、変化が起こった場合の対応も大切です。人間関係、勉強、仕事、そして人生についてよく考えさせる小さな一冊です。



～私のおすすめの本～

おすすめいただいた先生

英文学科・応用言語学
クリス・ヒューストン先生

本を友にすれば、きっと親友になってくれます。どんな暗い道も明るく照らしてくれます。



●一人ひとりの力は小さくとも・・・広がる学生ボランティア活動
 学内では、さまざまなボランティア活動グループが誕生し、多くの学生たちが主体的に、活動の輪を広げています。

学校ボランティア「つしよ」

学校ボランティア「つしよ」は、「子どもも大人も教師も学生もみんないっしょ」を活動目標に発足したボランティアグループです。2005年度は、活動の幅をさらに広げ、市内の小学校3校と、宮城学院中学・高校でさまざまな活動を行ってきました。小学校では、昼休みを利用した読み聞かせ、支援の必要な子どもたちへの学習援助、地域の学校に入学した外国の子どもたちの通訳などの活動を行っています。

昨年未には、太白区内の小学校で教員とボランティアの学生とが一緒になって行う授業場面を研究部会で公開しました。多くの小学校の先生方が参加され、授業後の研究会でも活発な議論が展開しました。



闘病中の子どもと家族を支えるボランティア

昨年のクリスマススイフ、小児病棟でのボランティアに関心をもつ発達臨床学科3年生が、東北大学病院に入院する約80名の子どもたちに手作りのクリスマスプレゼントを贈りました。授業を通して、病児の発達支援に関心をもった学生たちが中心となり、およそ半年の準備期間を通して、乳児、幼児と小学生の男女別の4種類のプレゼントを作製しました。

これらのプレゼントの特徴は、それぞれの発達段階に即した遊びを支援することを目的に作製された遊びの素材集であることです。また、付き添いのご家族にも役立つように、簡単な遊びのレシピ集も作製しました。

当日は、サンタやトナカイになって、病室を一つ訪問し、プレゼントを手渡すことができました。これからも、闘病中の子どもたちとその家族に、支える心を贈る活動を続けたいと思えます。



サークル・学友会情報

学友会執行委員会

私たち学友会執行委員会はサークルとともに行事の企画・運営をしています。中高の生徒会のような存在で、サークルの縁の下の力持ちとしてがんばっています。行事は自分が楽しむことはもちろんですが、人を楽しませる裏方の仕事はとて素晴らしい経験となります。1つの行事が終わった後の充実感は大大きく、次の行事への力となります。



ラクロス部

ラクロスをご存知ですか。簡単に言うとホッケーの空中版です。ミニスカ&ポロシャツ姿の12人の乙女たちが、クロスと呼ばれるものを持って、ダッシュ・パス・キャッチ・シュートをします。昨年は第12回東北地区ラクロスリーグ戦学生チーム1位となり、第16回全日本ラクロス選手権地区予選に出場し、スポーツニッポンにも掲載されました。



チアリーディング部<RED BULLETS>

チアリーディング部RED BULLETSは、大学祭、オープンキャンパスなど学内行事を中心に活動しています。学外で演技をする機会も年々増え、昨年はフルキャストスタジアムでの楽チアリーダーズとのコラボレーションなどがありました。また仙台大学アメリカンフットボール部の専属応援もしています。昨年12月には全日本学生チアリーディング選手権大会にも出場するなど、躍進中です。



campus calendar キャンパスカレンダー

4月4日(火)	入寮式
4月5日(水)	入学式
5月2日(火)	120周年記念音楽科スタッフコンサート "Giardino della Musica IV"
5月8日(月)	就職ガイダンス開始
5月9日(火)	新入生歓迎会
5月19日(金)	学友会春季総会
5月30日(火) ~31日(水)	日本文学科日本語・日本文学基礎演習 研修旅行
6月10日(土)	大学後援会総会
6月22日(木)	キリスト教教育特別集会
6月24日(土)	オープンキャンパス in spring
7月29日(土)	オープンキャンパス in summer
8月20日(日) ~9月14日(木)	英文学科海外研修(イギリス)
8月末 ~9月(予定)	国際文化学科海外実習(イタリア)
9月18日(月)	創立記念日
9月30日(土)	創立120周年記念礼拝 礼拝堂 献堂式
10月21日(土) ~22日(日)	大学祭
10月28日(土)	創立120周年記念式典

「覆された宝石」のような朝



古いアルバムを取り出す。真っ赤な楓の大樹と木漏れ陽に煌めく噴水。30年前の秋の土曜日の午後、少女の髪が母親が子供の手を引いて東三番町の正門から入ると、少年は池の端に走りよる。母親は腰も下ろさず小さな本を開き、水面の落ち葉越しに魚と戯れる少年を見遣りながらも、また、光の中で本の思考に立ち戻るのか。

「尖った船に花が飾られ デイオニソスは夢みつつ航海する」

窓辺からは遙か太平洋が照り映えて光る。

私は、中庭に臨む研究室の窓を閉め、暗い階段を小走りに駆け下りた。裏門から消えゆく少年と母親を背に、午後の陽射しに輝きながらもみじが水面に光をそそいでいる。幻の残像が浮かぶ。

「その少年の名は忘れられた 麗かな忘却の朝」

柳町通りから三番町の石造りの教会の脇を抜け、電車通りに出た。「葡萄園」という名のカフェに上り、読みかけの詩集を開く。

「少年は小川でドルフィンを捉えて笑った」

私は小声で呟いた。

(エスパス ペルデュ…エスパス ペルデュ…)

編集後記

出発のとき…“le temps de partir”

宮城学院が創立120周年を迎えた記念すべき本年、宮城学院女子大学広報誌“partir”が誕生いたしました。1886年6月、日本の女子教育に献身することを誓い、二人の婦人宣教師がハリスバーグを出発してから120年。仙台の地に、女性のための学び舎として誕生した宮城女子学校が、「宮城学院女子大学」として形を変えた今日も、時代を生きる女性を育成するという使命に変わりはありません。宮城学院女子大学が、120年の歴史をふまえ、新たな時代の課題に向けて出発する——その出発のドラの響きを、この広報誌“partir”にのせてお届けします。

120年前、母国の港にたたずむ二人の婦人宣教師。その出発のときに思いをはせつつ、創刊号の編集作業を終えました。(HI)